

CML とともに歩んだ大学生活

M.N 20代 女性

私は大学1年の終わり頃にCMLと診断されました。入学当初から疲れやすさや強い眠気を感じていましたが、まさか病気だとは思っていませんでした。診断を告げられた瞬間、頭が真っ白になりました。医師から「適切な治療をすれば命に関わることはない」と説明を受け安堵したものの、将来への不安は強く残りました。

診断時の白血球数は15万、IS値は100%程度でしたが、治療により現在はMR4.5を維持しています。しかし、数値が順調に改善していく一方で、副作用との闘いは想像以上に厳しいものでした。スプリセル開始直後の1～2か月は、鉛のような強い倦怠感に襲われ、布団から起き上がれない日が続きました。その後、症状はゆっくりと和らいでいきましたが、治療開始から1～2年は倦怠感が続きました。毎朝「今日、大学に行けるだろうか」と自問する日々。体調の波に左右され、予定通りに動けない自分に焦りを感じることもありました。身体的なつらさと、周囲と同じように動けないもどかしさが重なり、何度も休学を考えました。それでも「友人と一緒に卒業したい」という思いが私を支え、一日一日を積み重ねてきました。

大学生活が続けられたのは、大学の合理的配慮制度と周囲の理解・支援があったからです。体調不良で出席できない場合も公欠として扱われ、欠席が続いた講義も単位を落とさずに済みました。実習や課題も柔軟に対応していただき、先生方は常に体調を最優先に考えて支えてくださいました。こうした支えがあったからこそ、治療を続けながら学びを継続することができました。

大学生活を振り返ると、CMLと共に歩む道は決して平坦ではありませんでした。遊びやアルバイトに費やす余裕はなく、目の前のことに向き合う日々でした。友人たちの何気ない日常をうらやましく思うこともありました。思い描いていた学生生活とは異なり、悔しさや戸惑いを抱えることもありました。しかし、治療開始から3年が経ち、現在はようやく穏やかな日常を過ごせています。あの苦しい状況の中で歩み続けられたことを、今は素直にうれしく思っています。まだまだ課題は残りますが、一步一步前に進んでいきたいと思います。